

クレイステネス改革をめぐつて(二)

芝 川 治

三

1

次に、改革そのものとは別に視角を設定して、そこからクレイステネスの事業につき考究を進めていく事にしよう。ここで主として問題とするは当時の政治情勢である。僭主政倒壊後のアテナイなるが、政局の主導権をめぐつてクレイステネスとイサゴラスの間に党争が生じた。この間の事情はヘロドトス⁽¹⁾によって周知の通りであるが、この争いに敗れたクレイステネスとしては、民衆を自派に引入れて今度は優位に立った。そして曲折を経つつも最終的に勝利を得るのである⁽²⁾。

この党派抗争であるが、これは学説史においては、通例、貴族同士の対立とされる⁽³⁾。これにおいて、クレイステネスが非勢に立つて局面打開策を講じたのであるが、これが所謂彼の方向転換である。名門に生を享け民衆を輕侮していたクレイステネスであるが、ここにおいて初めて一般大衆に目を向けるようになった。彼は貴族政に倦んだ民衆に民主的改革を約束した。かくして彼は広汎なる支持を獲得してイサゴラス派を圧倒し、改革を遂行したというのである。大略かくの如きが過去において主張されてきたところである。学者によって多少の相違は含みつつも、これは学説史における最大公約数的見解として差支えないであろう。

かくなる解釈であるが、若干の疑義は呈せられる。それは凡そ五点に亘る事とならうか。貴族の抗争、クレイステネスの転向、彼の人氣、

クレイステネス改革をめぐつて(一)

民衆の状態、そして改革そのものといったところがそれに当る。この中、改革それ自体は既に扱った。残余の四点、相互の関連少からずとするのであるが、一応、順に述べて行く事としよう。

2

先ず「貴族の抗争」であるが、対立する両派につきその実態、政治的立脚点を専ら史料にのみ即して探る事にしよう。これは可能な限り先入見を排除せんがためである。両派特にその指導者であるが、これはヘロドトスによつて以下の如く記されている。⁽⁴⁾「アテナイで支配的勢力を握っていたのは二人の人物で、一人はアルクメオン家の一族たるクレイステネス……もう一人はティサンドロスの子イサゴラスで名家の出であるが、その先祖に関しては私もよく知らない。εν δὲ αὐτῶν (sc. Ἀθηναίων) δύο ἄνδρες ἐδυνάστευον, Κλεισθένης τε ὁ ἄλλος Ἀλκμεωνίδης…… καὶ Ἰσαγόρης Τεισάδου οἰκίης μέν ἐσσι δοκίμου κτλ.」

イサゴラスから始めるが、これはその出自に関してはοἰκίης……ἐσσι δοκίμουである。ヘロドトスにおいてδοκίμοςの用例は数多に及ぶが、それは「名の知られた、立派な、声望の高い」という事から、社会的に「重立った」、或いは「名士、重臣」の意でも用いられる。この点、ギリシア人、バルバロイの別を問わず、同様の意味合で使用さる語である。単複両形共用いなる事、言うまでもない。全般的にその意味するところ幅広き語であつて、一定の社会集団を示す術語といったものではない。ただ、知名人、有力者を漠然と指すのみにして、平民より隔絶せる特定の身分なるものを表示するわけではないのである。⁽⁵⁾従つて、イサゴラスの場合も、文字通り「名家の出」という事であつて、それ以上ではない。

ヘロドトスにはまたδύο ἄνδρες ἐδυνάστευονなる表現が見られた。δύο ἄνδρεςとはクレイステネスとイサゴラスである。δυναστεύεινはこの箇所以外にはヘロドトス全巻を通して五度現れる(V. 97.1, VI. 35.1, 39.2, 66.2, IX. 2.3)。それらは何れも「勢威を揮う、有力なり」なる意味にて使用されている。⁽⁶⁾

アリストテレスはイサゴラスを上流富裕者層の代表と観じたる模様である。これは『アテナイ人の国制』二十章においては分明ならざる

点なしとせぬ⁽⁷⁾が、同書二十八章よりして確実である。この二十八章はアテナイ史を一貫して上流富裕者層(γνώριμοι, ἐπὶ πόροι, ἐπιφανεῖς)と民衆との対立、抗争として描写したものである。この両勢力中、後者が民主政治を推進したるに對し、前者はさにあらずして、寡頭政的傾向を帯していたという事であろう⁽⁸⁾。そして、イサゴラスは或る時期において前者を代表するものとされているのである⁽⁹⁾。アリストテレスの見方はかくの通りなるが、吾人としてこれに直ちに追隨するは危険なしとはせぬ。アリストテレスの歴史記述には図式的なるを免れぬものがあるが故なり。

イサゴラスの政治的立場につき教示するところ最も多きは次の事実なり。党争において非勢に陥ったイサゴラスがため、その要請に應じてスパルタ王クレオメネスはアッティカに來援した。その際、彼はクレイステネスの一統を放逐し、然る後に、イサゴラス派の三百人に政權を委ねんとしている⁽¹⁰⁾。数百或は千といった人数が国制を掌握する事、これはギリシアのポリスでは屢々見受けられるところである。そういった政体はギリシア人の言葉では、通常、寡頭政(ὀλιγαρχία)である。イサゴラスはスパルタの支援下、寡頭政を指向するに至ったのである。従つて、さなるイサゴラスが一派、向後、これを「寡頭派」と呼ぶ事にする。これには身分制的含意はないのである。

他方、クレイステネス派であるがその立場、主張は如何なるものであつたか。クレイステネスは最高の名門たるアルクメオン家⁽¹²⁾の出であるが、この一族は僭主政末期よりそれを打倒すべく種々画策を行つてゐる。レイプシュドリオンに城砦を築きしもその一環なるし、遂にはスパルタ軍をして僭主を放逐せしめるに至つてゐる。アテナイ解放の功労者とされる所以である⁽¹³⁾。ただ、この時点にて、アルクメオン家が僭主政を嫌忌したるは明瞭なるが、如何なる政体を以つて僭主政に代えんとしたか、これが推知は必ずしも容易ではない⁽¹⁴⁾。

クレイステネスの父メガクレスはソロン改革後における三党派鼎立時、海岸党の領袖であつた。三党派の中、ペイストラトス率いるところの山地党に關してはその政治的立場はほぼ明らかである。これは貧民大衆を主要なる支持基盤としていたらしい。この点は史料が一致している。他方、平原党であるが、これは富裕者を中心としていた模様である⁽¹⁵⁾。問題の海岸党であるが、これは或る時には平原党とまた別の時には山地党と提携している。これに對するに平原党と山地党が提携した形跡はない。両派の敵対が伝えられるのみである⁽¹⁷⁾。これを以つて案ずるに、海岸党は兩派の中間に位置したのである⁽¹⁸⁾。アルクメオン家のメガクレスはいわば中間派だったのである。言うまでもないが、これはクレイステネスの父親の話である。しかし、クレイステネス自身の政治理念を推察する上で家の伝統を顧慮するは意味なしとはせぬ⁽¹⁹⁾。

ところである。

クレイステネスの所謂転向。政争における敗北を機としてクレイステネスの行動パターンに変化見られるは否定すべくもないのであるが、問題はこれを如何に評価するかである。この件に関する第一の史料はヘロドトス(V. 66, 69)である。これは彼に通有の傾向であるが、ヘロドトスは個人の権力欲を重視する。この点は僭主政末期からの一連の事件を描写するに際しても変りはない。クレイステネスを先頭とするアルクメオン家一統は僭主一族を討たんがためには「如何なる手段も辞さなかった」(V. 62.2)というのであるが、僭主政崩壊後においてもクレイステネスの権力欲に照準が合せられている。従って、民衆との提携も彼にとつては勝利を占めんがための方便に過ぎぬ事になる。すべてはクレイステネスなる個人の側から描写される事となるのである。然らば、「クレイステネスは以前には歯牙にもかけなかった民衆を、この時になって完全に自派に引入れた」(V. 69.2)なる叙述なされるはけだし当然である。クレイステネスの行動が誇張を以て描かれる結果となるのである。⁽²¹⁾宛然、コペルニクスの転回なされたが如しである。

かくなるヘロドトスの叙述よりすると、クレイステネスの方向転換に至るまで、アテナイの民衆は政治には無関心であつたかの如く受取れる。然るに、ヘロドトス自身の記事より知られるところであるが、クレオメネスが僭主一党をペラルギコンに包囲したるに際して、積極的ならずとは雖もアテナイ市民もこれに参加はしている。⁽²²⁾アテナイ市民はクレイステネスの「転向」を俟つて初めて政治に参与するに至つたというものではないのである。

一般に前古典期アテナイであるが、政治を志す者、有力者の間に地歩を固めるを必要とする。有力者同士の間で友誼、姻戚関係を結び、それによつて自らの地位を高めていく。ただ、それだけで万事畢れりというものではない。時に応じて国民大衆にも直接訴えかけ、その支持を得る事にも腐心せねばならない。この種の行動パターンは平常時とはかくとして、大事出来の際には是非とも必要である。その実例も相当数知られている。ソロン改革時が当然それである。ソロンが民衆に直接訴えかけた事、これは論を俟たぬ。この事はソロンの詩よりしても明々白々である。ペイシストラトスによる政權掌握もそう。これも周知の事だが、ペイシストラトスは国民大衆を煽動して權力への道を拓いたのであつた。⁽²³⁾そもそもこの事は遠くキュロン事件の時よりしてそうではないか。キュロンのクーデタに際しても、自由なる市

民、自らの意志で以って政治に参与し得る多量の市民の意向が重要だったのである。⁽²⁴⁾

かかる実例を眼前に置くに、クレイステネスの行動は決死の跳躍⁽²⁵⁾などというものでは毫末もなく、ただただ先人に倣ったのみなる事、自ずと了解される。クレイステネスの行つた事とソロン、ペイシストラトスのそれとの間には質的差違などは看取されないのである。古典史料に依拠する限りにおいてはそのように言うより他はないところである。

以上、クレイステネスの「変身」を特筆大書するならばそれは適切を欠く事が示された。クレイステネスの場合、「貴族主義者」が突如として貌を変じ、爾後、民衆の政治を追求するに至つたというものではない。特に家の伝統を重視するに、彼は当初より寡頭主義者たらざる故、その行動に不思議はないわけである。

3

次なる問題は、クレイステネスが広く一般の支持を得たる理由である。これを民衆の意識、生活と関連せしめつつ扱つていこう。僭主政権倒壊前後における民衆であるが、政治に関し消極的なるは否み難きところである。嘗てアルクメオン家など亡命者、レイプシュドリオンに籠りたるに際し、一般のアテナイ人、これを熱心に支持したる形跡はない。⁽²⁷⁾ 僭主打倒にしてもスパルタ軍の力に因るところ大であつて、アテナイ人は主力をなしてはいない。⁽²⁸⁾ クレイステネスとイサゴラスとの党争に関しても、その当初の局面にあつてはアテナイ人大衆の反応はかばかしとはしなかつたのであろう。ところが、暫時の後、事態は急変を告げた模様である。忽卒の間にイサゴラスがクレオメネスに救援要請を発したのであるから、アテナイ民衆はクレイステネスを熱烈に支持するに至つたのであろう。また、クレオメネスが来寇を迎えて後も、アテナイ人多数はスパルタ人やイサゴラス派に対して闘つてゐる。クレイステネスが国外退去を余儀なくされていたにも拘らずそうなのである。彼に寄せられたるアテナイ人の支持はなかなかのものと言わずばなるまい。

かくなる変化は如何にして生じたのか。人々の熱意を喚起したのは何であつたのか。これに関して通説的立場より寄せられる解答、それはクレイステネスによる民主的改革の提示である。エーレンベルク⁽²⁹⁾によるならば、クレイステネスは国家のあるべき姿について確信を抱い

ていた。今や貴族と訣別し民衆と提携しなければならぬ。広汎なる大衆の合意に基いた政体を樹立せねばならぬ。これこそが彼の脳裡に占めていたのであった。⁽³⁰⁾このような理念は当然大衆に周知せしめねばならず、事実彼はそうしたであろう。この事こそが大衆の想像力を喚起しそれを熱狂せしめたというのである。

エーレンベルクは民衆による支配なる理想の提示に重きを置くが、もとより、具体的レヴェルにおける案件の改革に着目する事また勘しとはせぬ。この点において区制の施行が時に挙げられる。⁽³¹⁾オストワルドによれば、自治的団体としての区の導入が一般に歓迎された。区制はおそらく当初より住民に相当広汎なる自治を許容して貴族への依存を減少させ、人々に誇りの念を抱かしめる事となつたからというのである。これを要するに、区制は民衆の自立を促進し、その点において人々の求めるものを与えたというのである。

或いはもしかすると、区制とは別の方面に注目する事あるやもしれぬ。新十部族の設定などその一つであろうか。ともかく、所謂民主化する方向に沿うた改革の宣揚で以つてクレイステネスが人気を解明せんとする、⁽³²⁾これが通常である。ところで、先ず第一に、さなる改革が提唱されたとして、それは如何なる反応を惹起したであろうか。この点、先ず、アリストテレスの所論を参考にしよう。アリストテレスは彼の所謂第一種の民主政 *πρωτῆς δημοκρατίας* につき、それが農民を中心とするとしている。⁽³³⁾彼によれば、農民は田舎に居住して生業に勤むがため閑暇を有さぬ。従つて、彼らは容易くは中心市を訪わず、民会出席も稀で、政治には滅多に与らぬというのである。

アテナイにおいては都鄙の問題歴史的に重要であるが、前六世紀末の時点では農村人口、全体の大多数を占めたであろう。この事は評議員定数のみよりしても明瞭である。中心市より選出される評議員は、その周辺部を加算しても、ようやく全体の一割を満す程度なのである。この事より、当時における都市域人口の規模が推察されるであろう。かくなる農本の状態にあつては、人々、殊に農民は、通例、政治には関心を払わぬ。彼らは「仕事をするのを妨げたり何かを奪い取ったりするものがなければ、昔の僭主制をも我慢したものだし、現に寡頭制をも我慢している」⁽³⁴⁾(山本光雄訳)ともアリストテレスは記している。彼らにとりては政体の別などは顧慮の外なのである。自己一身の生活に安定を得ればそれでよしとするのであつて、取立てて改革などは求めぬ。仮に、現状変革訴うる者ありとしても、それには耳を藉さぬものである。この点、一般的に真理たる事、必定なるべし。

さすれば、当時のアテナイは何らか通常ならざる状態にあつたのであろうか。この点に関しては次の如き解答が寄せられるかもしれぬ。⁽³⁵⁾

それによれば、アテナイの民衆は長期に亘って貴族政の桎梏下にあったのであるが、僭主の政策を得て政治的に成長を遂げた。僭主は貴族を嫉視し平民の育成に努めたからというのである。かくして、民衆は遂に自らの手による支配を希求するに至った。六世紀末なる時点においてそれはまさに政体の変革を欲していたというわけである。

この問題に関して、ペイシストラトスの僭主政であるが、これは善政の評判で彩られている。この点は史料が一致するが故に疑を容れない。彼の場合、その本来的支持基盤⁽³⁶⁾はともかくとして、政權掌握後は下層民のみならず上流階級の間でも好評を博したと伝えられる⁽³⁷⁾。土地再分配が如き矯激なる施策を執り行った形跡はなく、上流階級が抑圧を蒙ったとは想定し難い⁽³⁸⁾。この時期に「貴族」の衰頹なる現象を指定するのは誤謬と目するべきである。第一、それは史料と齟齬を来すではないか。僭主にとりて最大の目的は自らの地位を維持する事である。そのためにそれは、自己当初の支持層には拘らず、凡ゆる階層と親和を保つべく努めるであろう。無用の摩擦を生ぜしむる必要はないわけだ。僭主よりして社会的變動を惹起すべき理由は存しないのである。

他方、これは周知の事なるが、一般民衆に対してペイシストラトスはよく心を配り、それをして安楽な生活を送らしむべく努力している。勸農政策はその一環である。ただ、さなる政策に別種の側面存したる事、これを忘却してはならぬ。それは市民の非政治化である。人々が田園に散在して仕事に没頭し、中心市に來つて国事に参与するを防止する、これもまたペイシストラトスの意図するところであつた⁽³⁹⁾。「村の裁判官」*δικασταὶ κατὰ ὄμιλον*を任じたるもまさしくその線に沿う施策であつた。アリストテレスの評する通りである⁽⁴⁰⁾。ペイシストラトスは民衆の政治意識を高揚せしめたところではないのである。

かかる非政治化の施策⁽⁴¹⁾は当然ペイシストラトスの子息にも承継された⁽⁴²⁾のであろうが、それは功を奏したと見られる。既に叙したるが如く、ヒッピアス政權末期からその崩壊後にかけて、アテナイ民衆は政局に対し一定程度距離を置いていたようであるが、これもさなる政策の然らしむるところ尠しとしかつたのであろう。一般のアテナイ人にとりて国家公共の事にはさしたる関心を払わぬ、これが半ば習慣と化していたのであろう。

或は、もしかすると、当時何らかの点で上下の対立が激化していたのであろうか。特別に「貴族」なる呼称を用いるにせよ、或は単に上流階級と呼ぶにせよ、上層からの圧迫があり民衆はその下で呻吟していたのか。特に経済的に困窮していたのであろうか。ソロン改革前夜

がそうであるが、生計に困難を来す時、乃至隷属の運命迫切せる際、通常の者とても蹶起を企図するに至る。富裕者の打倒を策し、国制の全面的変革を指向するであろう。ところが、六世紀末のアテナイはそのような状態にはなかったと思われる。富裕者と貧乏人の確執は知られていない。少くとも史料には全く伝えられていない。この点もまた、僭主の政策を想起した場合、逆に考うべきであろう。ペイシストラトスが民衆の生活に配慮したる事、如上の通りなるが、その政策は彼自身及びその子息の代にも成功を納めたのであろう。してみると、六世紀末のアテナイにおいて、生活上の不平等が鬱積していたと見るべき根拠はない。

以上、アテナイ人大衆にとりて現状変革を欲するが如き条件醸成されておらざる事が示された。変革の提案なされたとしても、当時、はかばかしき反応を生ずるが如き状況にはなかったと思料されるものである。ところで、翻って考えるに、そもそもクレイステネスはそのような提言をなしたのであろうか。

もしもクレイステネスが所謂民主的改革を提唱して一般の喝采を博したものとすれば、それは民会における議決を経た上でその通り実施されたはずである。クレイステネス派が勝利した以上、それを妨げる何物もないのだから。ところで、現実に遂行されたる改革といえ、アテナイの統治構造に関し劇的転換を招致する体のものではない。この点是否定し難きところである。かくなる事實は何を意味するか。通常説かれるが如き変革は本来的に提示されなかったという事ではないか。少くとも、その意味での一大変革案の提示を想定するは不適切である。さすれば、通説としては、せいぜい微温的なプランが大衆の前に提案されたとせざるを得なくなる。しかし、その程度のプランで以って大衆の熱狂が喚起されたのであろうか。

一体に、新部族制度は相当に複雑である。部族の数を十となす、市部、沿岸、内地のトリッテュスを組合せて一つの部族とする、或は一乃至数個の区よりトリッテュスを設定する事、また評議員の選定等々、これらが新制度の概要である。細部は措くとして、この制度が大綱だけでも国民の前に提示された場合、その意味するところが了解されたであろうか。新制度が政治的意図を内包していたとして、それは一般国民に容易に理解を許すが如きものではなかったであろう。少くとも、その点、一目瞭然とは到底言うを得ぬものである。改革がかく難解なる事、これにも顧慮を払わなければならない。⁽⁴³⁾

以上縷々説き来ったところより、クレイステネスの人気につき通常なされる説明には容易には従い得ない。そもそもこの問題は、従来、十分なる考究を受けてきたとは言い難い⁽⁴⁴⁾。新たに民衆の支配を齎さんとする訴えが大衆の熱狂を招いたという事、これが自明とされてきたのである。しかし、そのような訴えが歓呼を博するが如き状態に当時のアテナイはあつたのか。また、何故、他ならぬあの時点なのか。このような点、配慮至らざる憾みがある。もう少し当時の状況に立入って考察する事が必要なのではなからうか。

そのような配慮は当時の政治過程全般に亘っても払われねばならぬ。クレイステネスは何故にあのような行動に出でねばならなかったのか。それは、当然、反対派に対抗する上でその必要に迫られたからだ⁽⁴⁵⁾。然るに、イサゴラス派については誤解がなされている。イサゴラスは身分制的支配秩序の擁護者などではない。彼の一派は寡頭政を指向したのである。クレイステネス派が勝利してあの改革を実施した事、これは「党争における貴族の裏切から民衆の支配へ」なる図式で説明し得るものではあるまい。これも当時の歴史的状況の中で理解しなければならぬのである。就中、何故、まさしくあの改革なのか⁽⁴⁶⁾、である。「状況に即して」とか「あの時点で」といった事は片々たる問題かもしれない。しかしこれこそが歴史なのである。六世紀末の時点におけるアテナイの状況を精細に把握しない限り、如何なる学説を提示しようとも、それは超歴史的解釈に墮する虞れがあるのである。

当時のアテナイであるが、若干の施策が知られている。先ず、僭主一族の不正を記した碑がある⁽⁴⁷⁾。この年代は不明であるが、そのような内容の碑が僭主放逐直後に建てられたとするのは不自然ではない⁽⁴⁸⁾。次にアンドキデスの報ずる法令である⁽⁴⁹⁾。これはスカマンドリオスなる人物アルコンたりし時制定されたものである。その内容は市民の拷問を禁じたるものなる事、文脈より明白である。スカマンドリオス、アルコンに就きたる年代は不明なるが、五一〇／九年に置かるべき可能性はある⁽⁵⁰⁾。もう一つ、アンテノルによるハルモディオスとアリストゲイトンの像がある。これの建立はプリニウスを是とするならば五一〇／九年である⁽⁵¹⁾。

例のdiaphephismosもこの時期に行われたのかもしれない。出生の純粋ならざる者が僭主政の顛覆後、市民権を剝奪されたという一件であ

る。⁽⁵²⁾ 本来市民たるべからざる者に市民権を授与する事は僭主の場合実例の見られるところであるし、ペイストラトス一族もさなる施策を行った可能性は十分にある。そうすると、*diapsephismos*も僭主の政策を否定する処置となる。⁽⁵³⁾ 僭主政権倒壊後の時点にて、各人の政治的立場とは別に、かくなる処置取られるは不自然とはせぬであろう。⁽⁵⁴⁾

以上四件、正確なる時点詳細になす能わざるものなるが、何れも僭主政権崩壊後比較的早期時期に行われたのであろうか。それらの基調をなす精神は僭主政を否定する事、これである。ヒッピアス政権末期における暴政の記憶鮮明なる当時、僭主政を否認してその再度の発現を防止する事、これが国民的課題だったのである。

兎角の中、イサゴラスが寡頭派的姿勢を明確に現すに至ったのであろう。アテナイにおいては伝統的に寡頭派は強力でなく、少くとも久しきに亘って厳格なる少数政治は行われなかった。そこへ、スパルタが後援の下、イサゴラス一派が寡頭政を樹立せんとしたのである。これはアテナイの伝統に背馳し、そこには異質なる要素を将来する事になる。寡頭政の下では多数の者が国民権より排除される。民会出席権などは、アテナイ民衆はこれを古くより有していたのであるが、これをも剝奪される事となる。これは憤激を惹起し、国民多数にも危機意識を抱かしめた⁽⁵⁵⁾と思われる。これは大衆にとっても由々しき問題であり、当時のアテナイにおける喫緊の課題となったであろう。

イサゴラス派の少数政治はアテナイ人の眼には暴政と映ずるものであった。その点で、それは僭主政に通ずるものと感じられたであろう。⁽⁵⁶⁾ かくして、暴政、法律に基かざる恣意的支配、並びにその防止が肝要の問題となったのである。別段、一方に上流富裕者層が立ち、他方には下層民が位置して、両者対峙する状況にあった⁽⁵⁷⁾というものではないだろう。況んや、当時、身分制的支配が厳存してその是非が問われていたわけではない。

5

政治から稍々離れて、もう少し幅広く、アテナイの置かれた歴史的状況に一瞥を加えておこう。先ず社会経済的状况であるが、これについては諸々の機会に触れるところがあった。それによると、六世紀中葉より終末にかけてのアテナイには、社会経済的に顕著なる変動生じ

たとはなし難きものがある。僭主にその意味での変化を帰するのは無理多しとすべきであった。

これと共に、アリストテレスに従って民主政治の展開につき若干顧みておこう。周知の通り、政体変遷の原因につき彼は軍制の変化と人口の増加を慮る。この中、後者はともかくとして、前者は明快である。騎兵から重装歩兵中心へ、更にはポリスによつては水兵の比重が増大したというのがそれである。また、民主政の各種に関して彼は都鄙人口の多少に着目する。かくなる軍制の変化と都鄙の人口比なる二要因⁽⁵⁸⁾に徴してアテナイ史を回顧するに、六世紀末の時点においては大きな変動は見られないと思われる。特筆すべき変化生ずるは五世紀に入りて数十年を経たる後ではなからうか。この時期には水兵の比重が高まり、都市人口が増加したのである。この二つの現象は相互の関連浅からずとするものであつて、サラミス海戦に端を発し、海上同盟の発展と共に進行の度を加えたるものである。

もしも、クレイステネス改革をして政治上の一大構造転換となすのならば、その背後には改革断行を要請するだけの社会的経済的或は軍事的条件を措定するのが、一応、常識というものであろう。ところが、そのような条件は当時醸成されていなかった模様である。然れば、通常の解釈は、社会の変化を伴わずして政治上の変革のみ遂行されたと断じてしまう事になるではないか。この点、少くとも不自然の感は免れないであろう。

[註]

- (1) Hd. V. 66—72.
- (2) 五一—〇年の僭主政倒壊より五〇八—七年の改革に至るまで、クロノロジーは定まらない。アルコンに就きたるイサゴラスの比定など問題多きところである。イサゴラス派優勢の時期とか形勢反転の正確な時点は明確になす事能わざるものがある。このため、以下の叙述には茫漠たる要素が付纏う事となるが、これは止むを得ぬところである。
- (3) これは *dynastic struggle between two factions of noblemen* (Ostwald, *op. cit.* 148) に尽きるというわけだ。
- (4) V. 66.1. ヘロドトスの訳文は概ね松平千秋氏のもの (岩波文庫版) による。
- (5) ヘロドトスの場合、*πρώτος, λόγιμος, γενναίος* なども *δοκίμος* と類似の語である。これらも特定の身分を表す術語というものではない。
- (6) 別段、「貴族政的ピラミッドの頂点に立っていた」(フォレスト、前掲邦訳二二—二三ページ) 事を示すものではない。
- (7) *Alh. Pol.* 20.1 においてイサゴラスが *φίλος τῶν τριτάτων* となされているのは気に懸るところではある。これについては拙稿『アテナイ人の国制』(「十章」) (大手前女子大学論集) 十七号、昭和五十八年十一月) 二一—二二ページ及び二二—二三ページ註(18)。

- (8) アリストテレスの用語法並びに政治理論に関しては前掲拙稿『アテナイ人の国制』二十一章「一四五—一五二ページ参照」。
- (9) *Ath. Pol.* 28.2.
- (10) *Hdt.* V. 72.1; *Ath. Pol.* 20.3. クレオメネスはこれに失敗した後、ペロポネソス勢を語らうて、またもやアッティカに侵寇している。その時はイサゴラスを僭主として立てんとしたとされる (*Hdt.* V. 74.1)。
- (11) イサゴラスを中心として画策されたる三百人の政権は、従来、*Oligarchie der Adigen* などと称される事があった。しかしこの表現の意味するところ何たるか、理解に苦しみどころである。これをギリシア語で表し得るのだろうか。ὀλιγαρχίαの概念ぐらいは明確に把握しておかなければならぬ。蛇足ながら、「貴族反動」、「滅びゆく貴族身分」、或はクリエンテラはギリシア語で如何に表現するのであろうか。
- (12) アルクメオン家を名門とするに際して、ヘロドトスの用ゆる語は δόκιμος 及び λαμπρός である (V. 62.3, VI. 124.1, 125.1)。
- (13) *Hdt.* VI. 123 ; *Thuk.* VI. 59.4 ; *Ath. Pol.* 20.4.
- (14) *Hdt.* VI. 121.1 並びに 123.1 において、アルクメオン家は μισοτύραννοι とされている。μισοτύραννος にかけてはイサゴラスもその撰には洩れぬ、少くとも僭主政末期においては。彼も僭主一族をペラルギコンに包囲攻撃しているのだから (*Hdt.* V. 70.1)。⁸⁾これを要するに、ヒッピアス政権末期において政局の焦点たりしは僭主政の是非である。
- (15) クレイステネスの所謂転向に至るまで、アルクメオン家の一統は古き貴族の政治を演じたこととされる事、従来においては多きを算えた。その根拠として、一つにはレイプシュドリオンにて斃れし者を悼む歌 (*Ath. Pol.* 19.3) の εὐναρπίδας が時に挙げられる (*Hignett, op. cit.* 125)。⁹⁾しかし、εὐναρπίδης は形容詞として極く普通に「良き生れの」なる意にて用いらる事多き語である。レイプシュドリオンの歌の場合も当然それに当るのである。この歌の εὐναρπίδας を一つの身分を表す術語と解すると、意味の上で前後の連続が円滑を欠くように思われる。
- ケドンの歌における ἀγαθός (*Ostwald, op. cit.* 138 n.5) は問題外として、この関連では他に *Hdt.* V. 66.2 の ποδοεραπίστειναι に着目される事もある (K. Kinzl, *Athens: Between Tyranny and Democracy, Greece and the Eastern Mediterranean in Ancient History and Prehistory, Studies Presented to Fritz Schachermeyr, Berlin and New York 1977, 201 n.11*)。¹⁰⁾しかし ποδοεραπίστειναι は「味方に付ける」「仲間にする」というだけの意味である。¹¹⁾
- ⁸⁾ *Ath. Pol.* 20.1 ὁ ἐραπειάωνος ὅτι τὸν ποδοεραπίστειναι cf. Wade-Gery, *op. cit.* 19.
- ⁹⁾ *Arist. Pol.* 1305a23—24.
- ¹⁰⁾ *Ibid.*
- ¹¹⁾ Cf. *Ath. Pol.* 13.4.
- (16) クレイステネスの祖父たるアルクメオンはソロンと政治的行動を共にした可能性がある。Plut. Solon 11. ソロンまた中間派たる事、贅言を要さぬところである。
- (17) ヘロドトスは VI. 121 及び VI. 123 においては、アルクメオン家の僭主に対する行動につき、それが単に権力欲より発するものとはしていない。本章註 14) 参照。ヘロドトスは別の箇所では別の語り方をするわけだ。
- (18) ヘロドトスの思考及びテキストにつき詳細は前掲拙稿『アテナイ人の国制』二十章「七ページ」、拙稿「ヘロドトスとクレイステネス」(『大手前女

子大学論集』十五号、昭和五十六年十一月）九八—一〇二ページ。

なお、アリストテレスの記述はヘロドトスとは対蹠的である。前掲拙稿『アテナイ人の国制』二十章「六—一二ページ。ヘロドトスとアリストテレス何れにもせよ、史料の傾向性をよく認識せねばならない。

(22) V. 64.2. ὅτι αἱ Ἀθηναίων τοῖσι βουλευμένοις εἶναι ἐλευθεροῖσι。更に V. 65.2. οἱ Ἀθηναῖοι。これらの箇所では上流階級とか民衆とかの区別はなされていない。クレオメネスに協力したるはアテナイ人一般だった事になる。ただ、この時点においては民衆は必ずしも積極的には行動していないようである。αἱ Ἀθηναίων τοῖσι βουλευμένοις εἶναι ἐλευθεροῖσιからは、自由を欲せざる者また少からざりしという事になろう。本論文八五ページ参照。cf. *Ath. Pol.* 19.5—6, 34 35 *Ath. Pol.* 19.3 によるならば、レイプシュドリオンに拠った亡命者の許へ一定数のアテナイ人が参じている（συνεστῆσαν θύον τινες τῶν ἐκ τοῦ ἄστεως）。

(23) *Hdt.* I. 59, 4—5; *Ath. Pol.* 14.1.

(24) *Thuk.* I. 126.7—8.

(25) ヒグネット (*op. cit.* 125) はクレイステネスの行動を以って a leap in the dark としている。

(26) マッカーガー (D. J. McGargar, *The Relative Date of Kleisthenes' Legislation, Historia* 25, 1976, 394—395) など特にその事例に属する。

(27) *Hdt.* V. 62. 2; *Ath. Pol.* 19.3.

(28) これはまたトウキュディデス (VI.53.3, 59.4) の強調するところである。 *Hdt.* V. 64.2 については本章註(22)。

(29) V. Ehrenberg, *Origins of Democracy, Polis und Imperium*, Zürich 1965, 289—290.

(30) “He (sc. Cleisthenes) was the first to aim at the ideal of government by a free people....” (*ibid.* 292)

(31) Ostwald, *op. cit.* 152—153; Andrewes, Kleisthenes' Reform Bill, *CQ* NS 27, 1977, 243. ただ、区制に関してオストワルド自身は留保を付している。区制はそれ単独では一般的熱狂を喚起する能わずという事であるが、その通りであろう。

(32) クレイステネスの民衆掌握につき、古人の見解は如何であろうか。ヘロドトスはその理由をイオニア人蔑視に求めているようである。しかしこれは参考にはならぬ。(前掲拙稿「ヘロドトスとクレイステネス」九九—一〇〇ページ) 他方、アリストテレスによれば、その理由は一つには ἀποδοδὺς τῷ πλῑθει τῇ πολυτελείᾳ (*Ath. Pol.* 20.1) にある。然らば、これは本文に記した通説的解釈の根拠を提供するものとされるかもしれない。ただし、アリストテレスの語るところ、近代人特有の解釈とは合致しないし、そもそも ἀποδοδὺς……なる句、その意味するところ不明瞭である。また、*Ath. Pol.* 20.4 ではそれは別の理由が与えられている。そこでは、アルクメオン家は僭主と抗争してきたからこそ民衆の信頼を受けたとされているのである。これらの問題や『アテナイ人の国制』二十章の史料的价值は既に論じた。前掲拙稿『アテナイ人の国制』一一—一二ページ。

(33) *Pol.* 1318b6—1319b1.

(34) *Ibid.* 1318b17—20.

(35) Cf. Andrewes, *The Greek Tyrants*, New York and Evanston 1963, 113—115.

僭主政下における民衆の成長は多く唱えられるところである。次の一句など、この点、まさに印象的なものがある。“...for it (the demos) was largely

the creation of the tyrants...”(Hignett, *op. cit.* 125)

(36) 本章八三ページ

(37) *Ath. Pol.* 16.9.

(38) ヒッピアスもこの政策を継承したと見られる。SEG 10, No352.

(39) *Ath. Pol.* 16.3. また *Plut. Solon* 31.2.

本文に記したペイシストラトスの施策もまた権力保持の必要に発するものであった。

(40) *Ath. Pol.* 16.5. なお、村の裁判官は「地方有力者の伝統的裁判権を打破すべく設置された」などというものではない。領主裁判権などは前古典期アテナイにおいては絶えて耳にせぬところである。

(41) アリストテレスは『政治学』五卷十一章において僭主政の護持策を扱っているが、そこでは勸農政策はそれ自体としては現れない。そうすると、『アテナイ人の国制』十六章はアリストテレスの政治理論に由来するものたらずという事になる。

(42) Theopompus F 311 (Jacoby); Pollux VII.68. また Aristoph. Lys. 1150-1156. cf. *Ath. Pol.* 17.3.

(43) 従来、改革の提示は政局の帰趨を決定した要因として重要視されてきた。従って、改革案の一般への公表から民会への上程、更には民会通過までの日時が論議の対象となつてきた(e.g. D. W. Knight, *Some Studies in Athenian Politics in the Fifth Century B. C.*, *Historia Einzelschriften* 13, Wiesbaden 1970, 17)。よりながら、クロノロジーはさておき、改革案自体が派手な性質を有する事、この点には常に留意しなければならない。

(44) この問題を立入って論じたのは、オストワルド(*op. cit.* 149-157)の他にはルイス(*op. cit.* 38)を算える程度である。オストワルドの議論は示唆に富むものである。

(45) 本章註(55)。

(46) あの改革を当時の状況との関連において説明する事、これは困難を極める。何れにせよ、過去において、その説明を成功裡になした者はいない。

(47) Thuk. VI.55.1.

(48) Cf. Busolt, *Griechische Geschichte* II², 398 Anm. 2.

(49) Andok. I. 43.

(50) T. J. Cadoux, The Athenian Archons from Kreon to Hysichides, *JHS* 68, 1948, 113. カズマーの推定する年代を適切とするならば、この法令はヒッピアスによりアリストゲイトンに加えられたるが如き拷問(*Ath. Pol.* 18.4)の再発防止を意図していた事となろう。

(51) N. H. 34.17. 反僭主感情の横溢を示すものとしては「ハルモディオスの歌」もある。これにつきては本論文五章五節参照。

(52) *Ath. Pol.* 13.5. *μετὰ τῆν τῶν τυράννων κατάληξιν ἐποίησαν διαψηφισμὸν κτλ.*

(53) もともと、diapsephismosはクレイステネスの「市民権賦与」との関係で複雑な問題を孕むものではあるが。

(54) diapsephismosは寡頭派の方策とは言えない。cf. F. Jacoby, *Die Fragmente der griechischen Historiker* IIIb Suppl. Vol. 1, Leiden 1954, 159. 市民団の純化策は寡頭派に限定されるものではないのである。cf. Diod. XI.72.2-3.

(55) アテナイ民衆が熱意を以って政治に対するに至ったのもこれがためであろう。如何なる者と雖も既得権益の侵害には敏感なのである。民衆とは何かを奪い取られる時、初めて動き出すものなのだ。

クレイステネスはこうした一般国民と危機意識を共通にし、それを指導する立場に立ったのであろう。かくして彼は広汎なる人気を博するに至ったのであろう。

(56) アリストテレスによれば寡頭政の最も極端なる形態は閥族政 *dynasteia* である。これは最早法律が支配せず、人間が主権者たる政体であって、その点で僭主政や最終種の民主政に照応するものである（前掲拙稿『アテナイ人の国制』二十一章「一四七ページ」）。イサゴラス派による三百人の政権は、多数のアテナイ人には閥族政の如きもの、ひいては僭主政に通ずる暴政と受取められたであらう。

(57) イサゴラスはクレオメネスと親密なる関係にあった（*Hdt.* V. 70.1）。彼は本来的に寡頭派的傾向を帯びていたのであろうが、スパルタの後援下、その旗幟を鮮明にして政局において有力なる地位を占むるに至ったのであろう。寡頭政権樹立の試みは、当時、富裕者と貧乏人との間に激しき対立が存した事を証するものではないと思われる。

(58) 典拠を若干掲げておく。軍制の変化に関しては *Pol.* 1274a 12-15, 1289b 35-40, 1297b 16-24, 1304a 21-24, 1321a 6-21; *Ath. Pol.* 27.1. 都市と農村の人口は本章註(33)参照。また *Ath. Pol.* 24.1.

四

以上、三章に亘って多々問題点を指摘したのであるが、それらは従来においても一定程度は認識されている。これをクリステイアン・マイアー⁽¹⁾によって見よう。マイアーはクレイステネス改革に関し、所謂その目的と現実に行なわれたる方策との間に懸絶あるを認める。マイアーは問う、旧来の社会的関係、騷擾を伴わずして破壊さるものかと。クレイステネス、アッティカの住民を強制的に移住せしめたるには非ず、市民団に新しき区分を設けたるのみである。過激なる施策はなしていない。旧部族やプラトリアも残されている。そのような措置は如何程の効果を有するのか。例えば区制の実施。成程、幾つかの区においては貴族の影響力は殆ど作用しなかったかもしれない。しかし、旧来の社会的関係は、それが鞏固なるにおいては、新制度の下でも持続するのではないか。従前、貴族支配の源泉がプラトリアにあったとして、改革の結果、プラトリアの首領と一般の成員、区への所属を異にする事態生じたとしても、その程度の事で従来の支配——従属関係に変化が生ずるものではあるまいというのである。以上、マイアーの指摘を総じて言うならば、区や十部族を新たに設置するといった程度の

事では旧体制は打撃を蒙らぬのではないか、クレイステネスが方策によりて世に謂うところの効果達成されたるか否か、頗る疑問ありという事である。

かくの如く、部族制改革の意義につきマイアーは疑義を呈するのであるが、今日、同様の疑念を抱懐する者必ずしも尠しとはしない。例えば、フォレストは次の如く述懐している。「部族制改革によつて」クレイステネスが何故アテナイ民主政を創始した事になるのか、一見したところ、これを理解するのは容易などといったものではない。⁽²⁾「この限りにおいてはこれは正当なる発言とすべきであろう。實際、吾人の問題に即するに、部族制改革とは全く激しからざるものであつたのだから。それ以外の側面、所謂ソロンの財産級や民会、評議會その他諸制度に関しても、クレイステネス改革微温的なは同様であつた。こうした事は万人の認識せざるべからざるところなのであつた。加之、オストラキスモスも通常の解釈に添うては説明するを得ぬものであつた。」

さて、これは少々由々しき事態かと思われるが、これに関して如何なる対処がなされるのであろうか。一つの方法は民主化なる理論を抛擲する事である。多少の差違は含みつつも、シーリー⁽³⁾、キーナスト⁽⁴⁾、ビクネル⁽⁵⁾、キンツル⁽⁶⁾、或はジーヴェルト⁽⁷⁾がこの立場に属する。⁽⁸⁾これらはクレイステネス改革に統治構造の転換を見ない。アテナイにおいては改革後も貴族の支配が猶持続するものである。キーナストによると、ペロポネソス戦争の時期まで殆ど一世紀に亘つて、アテナイの運命は専ら貴族の領導するところであつた。その間、貴族に代つて支配する階層は存在しなかつたというのである。況んや六世紀末において貴族支配を打倒するなど純然たる夢想に過ぎぬ。そもそも貴族が一致して反対した場合、クレイステネスには改革を実施する事能わざるものがあつたろうと、キーナストは言うのである。

ただし、これらは依然として少数派に留つてゐる。学説史においては伝統的解釈の方が優位を占めてゐる。問題はこれら多数派であるが、改革を以つて民衆の支配が直ちに実現したなどと断ずる者は少い。實際、クレイステネス改革に関し先ず行ふべきは旧部族制との比較検討であるが、これを成功裡に成遂げた者はいない。この作業は事実上不可能事に属するのであつた。従つて、考究の対象は専ら新制度に局限される事となる。然るに、その中、新十部族は通説的立場よりすると処理が困難であつた。もつとも、「新部族は貴族層を弱体化すべく企図された。」などと記される事はある。しかし、この点深く追究するは稀である。然らば、通説は区制に根拠を求めんとするか。しかしこれも立入った論証なされたるは知らぬ。少くとも区に関して、それ単独にては枳然とせぬ要素残るは否定し難きところである。それがために、

区はプラトリアとの関係にて論ぜられたりする結果にもなるのであった。然るに、クレイステネスはプラトリアの改編は行っていない。そこで、彼はプラトリアに区を並置する事によりその自然における消滅を意図したなどという主張までもが生じてきたのであった。

この種の主張であるが、これは巧妙この上なきものではある。しかしそれだけに却って不自然を極むものとなるのであった。謂うところの目的を達成せんとするのであれば、もう少し直截なる手段が行使されたはずなのであるから。⁽⁹⁾これに対しては今少し素直なる解釈を提示せざるべからずと言わねばならなくなる。過度に複雑な学説には何者をも納得せしめ得ぬものがあるのである。この種の学説は、所詮、諸家の苦衷を示すものに他ならぬであろう。クレイステネス改革につき、それが何故民主政たるか説明は容易でない。それを如何にしてか説明せんとしてかくなる解釈が生ずるに至ったのであろう。それにしても、諸家は民主的改革の理由を求めて苦心慘憺しているとの感がある。何故にかくまで苦心しなければならぬのであろうか。

新部族制に関して想起さるは、所謂民主的変革以外に種々の目的措定さる事である。その際、アッティカ統合の強化や新市民受容、ゲリマンドリング等も改革の目的として挙げられるのであった。これらは取分け新部族の構成に関して始終論ぜらるものであった。これらについては本稿第二章にて説くところがあつたが、そこで名を挙げた学者の中ではヒグネットやクロツシエ、ルイスが統合強化を主張していた。新市民受容はウォーカーが重視し、ゲリマンドリングはルイスやフォレストがそれを論じていた。⁽¹⁰⁾これらの中、ウォーカーは新市民の事を、ルイスは統合の強化をむしろ主として考えている。それらは改革本来の意図に付随するのみに非ずという事である。

これらの議論にはそれはそれで意義があるのである。ただ、改革に複数の目的を想定する結果、民主政の確立なる論点稀薄と化するは否み難い。その点で一義的に明快ならざる憾みは残る。クレイステネスは改革の全部を挙げて民主政実現がため一路邁進したとなす方が議論としては焦点が定まるのである。しかし、さなる視点からのみでは一概に律すべからざるものをこれらの論者は改革の中に感知するのであろう。

これらとは別に、通説的解釈に対しては留保を付する者また尠しとせぬ。これを先ずオストワルドによつて見よう。これによると、クレイステネス改革は文字通りの意味におきて「民衆の支配」を指向したるものではない。それは区や部族といった組織によつて、全国民に政治参加への等しき権利を授与せんとするものである。これで以つて、出生や富による特権は姿を消し、各人に出発点における平等が保証さ

れる事となった。従つて、これはアテナイ民主政治発展の条件を整備したものはあるが、それ以上ではない。貴族身分をそれ自体として排除せんとするものではないのである。五、四世紀のアテナイ民主政治はクレイステネス改革に淵源を仰ぐとは雖も、その開花はその後の発展に由るところ大である。クレイステネス段階においては民主政の発達未だしという事で、それには*demokratia*よりも*isonomia*なるスローガンの方が相応しい。オストワルド論ずるは大略このようなところである。

次にマルティン⁽¹³⁾。マルティンの所説には既に一部触れるところがあつたが、これによると前古典期アテナイにおいてはプラトリアなどを基礎とする大貴族支配体制が確立していた。これが*gentilizische Abhängigkeitsverhältnisse*に他ならぬのであつた。僭主政倒壊後の党争においてクレイステネスは非勢に陥つたのであるが、これはさなる支配構造の然らしむるところであつた。そうした構造は、従前においてもアルクメオン家にとりては不利に作用していたというのである。かくなる状況に直面して、クレイステネスは支配構造そのものの改革を企図した。これが部族制改革である。その結果、従来の支配——従属関係は倒壊し、最早アテナイ人は〈*geborene Gefolgsleute*〉*der adligen Geschlechter* たらなくなった。その限りにおいては改革、就中、区制の施行はアテナイ民主政の礎を築いたという事である。然るに、マルティンによると、これ以後においても貴族の勢威には強大なるものがあり、支配すべき階層は貴族を措いて他にはなかつた。従つて、五世紀に入つてもエピアルテス改革などを遙に越えて、政治は猶貴族の壟断するところであつたというのである。

かくなるマルティン説であるが、これは部族制改革に巨大なる意義を賦与する。その限りでは伝統的解釈と軌を一にする。然るに、改革は党争において自派勢力の拡大を図るがための手段に過ぎなかつたというのである。従つて、旧支配構造打撃を蒙つたるは、クレイステネスにとりては意図せざる結果⁽¹⁴⁾たりし事になる。しかも、改革にも拘らず新体制は未だ民主政治には程遠い。貴族支配、猶持続するというのである。これらの点において、通説的解釈に対してマルティンは多々留保を付するわけだ。

マルティン説に関しては部族制改革の動機及び結果の予測、その支持者等につき疑義が生ずるのであるが、それはここでは問わぬ⁽¹⁵⁾。ここで問題とすべきは爾後のアテナイにおける政治の展開である。マルティン説に則して陳ずるに、部族制改革は従前における貴族支配体制を根柢より破壊するものであつた。ただ、言うまでもないが、この事は瞬時にして政治万般を変質せしめるものではありえまい。貴族の影響力は猶、当分の間、持続する事になるのであらう。さりながら、それは十年、二十年を閲するにおいて早晚消滅の運命を免れぬはずである。

改革によって民主政発展の前提条件が形成されたというのであるが、それはいつまでもそのままの状態でとどまるものではあるまい。従属関係より解放されたという平民は政治的に覚醒し、国事を自らが掌中に納めるに至るであろう。然るに、マルティンはこれを否定するのである。惟うに、この点、マルティン説は齟齬を来してしまっているのではないか。少くとも、彼の所説難解なるは否定すべからざるところである。留保を付するにかけては、エーレンベルクもその撰に洩れぬところがある。これによると、クレイステネスはアテナイの採るべき政体につき確信を抱いていた。⁽¹⁶⁾ 彼は古き貴族政の復活には断固として反対し、それを防止すべく改革を実施した。この点で、彼はまさしく革命的地平に乘出した。⁽¹⁷⁾ 民衆もそれには歓呼で以って応じたというのである。かく論ずるを以って、エーレンベルクは完全に通説的理解の上に立つ。いや、それを代表するものといえよう。然るに、彼の口吻よりすると、当時、貴族の影響力には強大なるものがある。⁽¹⁸⁾ 民衆の意識は未だしなるし、クレイステネスの行動にも旧態依然たるところがある。この点において、民主政は向後、猶、樹立さるべきものなりというのである。⁽¹⁹⁾ しかし、これではエーレンベルクは留保を付する多きに過ぎる事になるのではないか。矛盾を指摘される虞れなしとはしないわけだ。⁽²⁰⁾

今日の学説、殊に支配的なそれを総覧して得られる印象は何か。「論究不足」、「過度に複雑」、「曖昧」、「難解」といったところがそれに当る。問題は「何故民主政か」なのであるが、これの解明には容易ならざるものがあるのである。この点、諸家は心魂を砕いてきた。簡単に民主革命と極付けて晏如たる者は稀なのである。この問題につきギリシア人の証言は信に値せずという事で、諸家は自らなりに解答を提出してきた。この種の解答には多彩なるものがある。然るに、簡明直截なる解釈嘗て提示されたるは知らぬ。例外は唯一ヴュスト⁽²¹⁾あるのみである。しかしこれには無理が多かった。かくして、「何故民主政たるか」は不明瞭のままである。残るは困惑のみ、不審は霽れぬ。これが学説の現状なのである。

何処かに根本的過誤が存するのではないか。諸家の試みであるが、これは結論を前提しているのではないか。民主的変革なる結論が先にあって、その理由を求めて苦慮している、これが現状ではなからうか。かつ、諸家はその理由を提示しても、それには自ら必ずしも満足しない。それにも拘らず結論にのみは固執する。この点、何か特別の事情が存するのであるうか。結論のみを護持せんとするのは何を以って

であることが。

〔註〕

①Ch. Meier, *Die Entstehung des Politischen bei den Griechen*, Frankfurt am Main 1980, 108-109.

②Forrest, *op. cit.* 194.

③Sealey, *op. cit.* 172-174.

④Kienast, *op. cit.* 279-280.

⑤Bicknell, *op. cit.* 35.

⑥Kinzl, *op. cit.* 202-203.

⑦Siewert, *op. cit.* 159-163.

⑧クレイステネス(E. Ruschenbusch, Rezension von: M. Ostwald, *Nomos and the Beginnings of the Athenian Democracy*, *Gnomon* 43, 1971, 415-416) もこの立場に含めてよいであろう。彼もまたクレイステネス改革の中に民主政の進展を記さず („...die Phylonreform, bei der man nun beim besten Willen nicht sagen kann, wieso mit ihr die Demokratie begründet worden ist.“)°

⑨本論文第一編(『大手前女子大学論集』二十号、昭和六十一年十一月) 一三五ページ。

⑩同右、一四四—一四七ページ。Walkerは*op. cit.* 144-148.

⑪この他に例えばブーソルト(Busolt, *Griechische Staatskunde* II, München 1926, 878) は民主化以前の他にクレイステネスの革命や、ヘルムホルツ・マイヤー(Ed. Meyer, *Geschichte des Altertums* II, Stuttgart 1893, 801- 802) やベロシカ(Beloch, *Griechische Geschichte* I² 1, Strassburg 1912, 396-397) はその上に新市民政策をも併せ考えている。

⑫Ostwald, *op. cit.* 153-154, 152.

⑬Martin, *op. cit.* 7-22.

⑭本論文第一編一三二ページ。

⑮この点で、これはシュエファー(H. Schaefer, *Besonderheit und Begriff der attischen Demokratie im V. Jahrhundert*, *Probleme der alten Geschichte*, Göttingen 1963, 136-141) の説に類似する。

⑯部族制改革中、区制については既に扱った。本論文第一編一三一—一三六ページ。

⑰Ehrenberg, *Origins of Democracy*, 286-296.

⑱本論文八五—八六ページ。

⑲“In all his plans and actions Cleisthenes clearly embarked on a new, in fact revolutionary, adventure, and thus it was he who finally changed the political world of Athens.”(*ibid.* 291)

⑳Cf. “However strong the position of some of the aristocrats still was during the following century, they never again ruled as a class.”(*ibid.*

288)

(21) Ehrenberg, *From Solon to Socrates*², London 1973, 103.

(22) “Democracy was a thing still to be established……”(Ehrenberg, *Origins of Democracy*, 290)

(23) この点、近代人特有の観念に由るところがあるのではないか。近代人の抱懐する図式によればギリシアの古き時代においては貴族政が布かれていたのであるが、時を逐うてそれは弱体化し、逆に民衆の地位が向上して民主政の成立する事例が増加した。クレイステネス改革に言えば、それは六世紀末なる早き時期の所産なるが故に、民衆の成長は未だ必ずしも十分ではない。貴族の勢力には猶鞏固なるものがあるというわけだ。

クレイステネス解釈に当ってこのような観念が作用していないとすれば幸いである。本論文五章六節参照。

(24) 本論文第一編一四一ページ。部族制改編をめぐる議論は近代人による推測に過ぎなかったのである。

(25) 同右、一四二——一四三ページ。